

# 情報教育における成果物の広報活動への利用について

—「出身学校・出身塾へ感謝の手紙を送ろう」という授業実践—

船 田 智 史 (樟蔭中学・高等学校)

## 第1章 本研究の目的と方法

近年、私立学校においていわゆる「入口」である生徒募集は、「出口」の進路指導と同様に重要な校務分掌の1つとしてあげられる。その担当にあたった教員は、勤務校の実態やカリキュラム・進学指導の内容や将来的な展望・ビジョンから生徒食堂のメニューに至るまで、学校の広報活動の一環としてすべてを認識したうえで、学校外に向けて広報活動をしていかなければならない。その中でも、学校独自で作られる学校案内などの広報アイテムは、その学校の様子を知るのに必須のハンドブックであるが、実際に通学している在学生の様子を細かく表現することは難しく説明に苦勞することが多い。また、学校行事の写真集や進学状況の一覧表なども附則の資料として作成されている学校も多く見受けられるが、学校の中での個々の生徒の姿を鮮明に現わしているかという疑問が残る。

一方で、教科によっては、授業のカリキュラムの中で創作活動をし、生徒作品として表現できるものも多く存在する。中学校で言えば、美術・習字・技術家庭など、高等学校で言えば、芸術・情報など、また総合的な学習の時間や学校独自の設定科目でも生徒作品として成果物が得られる授業形態もいくつかはあろう。

そこで、本研究では、実際の各教科の授業の中で創作される生徒作品が成果物の形になって表現できるものであれば、今までの形の広報アイテムと併せてそれを学校広報の枠組みに取り入れ、在校生の成長の様子を出身学校の先生や地域の方々に知らせていく実践を行った。

具体的には、以下のような授業実践を行った。

- 対象 : 中学1年生と高校1年生の全員
- 教科 : 中学生「技術」、高校生「情報」
- 時期 : 1学期
- テーマ : 中学受験・高校受験をして入学してきた生徒が、卒業してしばらく会っていない出身学校の恩師に対し、本校に入学できたことの喜びや感謝の気持ちを伝える手紙を、パソコンを使って作成すること。
- 広報アイテム : その手紙を教員自らが実際に相手先の出身校に訪問して配達し届けるところまでを実践する。

## 第2章 本研究に至る経緯と意図

入学前の学校 IT 教育の格差がいまだに大きく、生徒のパソコンスキルは未だに一定していないのが現状である。特に、私立学校は非常に広い地域から様々な入学者を受け入れるために、今までにパソコンを触ったことのない生徒から自身のブログをもつ生徒までが混在している。高校1年入学生の場合は、出身中学によって「技術」教科の中の「情報とコンピュータ」分野の習得内容が大きく異なっている。中学1年入学生に至っては、小学校でのコンピュータの使用頻度が極端に違うことがはっきりしている。今までは、毎年入学生がどの程度のコンピュータリテラシーを持っているのかを見極めるために、4月の授業で

かなりの時間を要していた。また、今までは生徒のスキル指導に対して、指導のしやすい規定のビジネス文書をタッチタイプさせていたが、本研究の手紙文の作成というテーマ設定では自分自身に関わる内容となるために、生徒の意欲の部分で授業に対する意識向上のアップが見込まれると考える。入学早々の時期は、新しい環境での適合や人間関係の成立などで緊張と不安感が続く生徒が多い。そのために、学校生活をうまく続けることができずに「不登校」になるケースも現在見受けられている。本研究による授業実践をすることで、受験を経験したことによる「新しい学校での自分の気持ち」をお世話になった先生への感謝のメッセージという切り口で表現することができる。そのことで気持ちの切り替えのきっかけができると思われる。また、現在の様子と今後の目標を記すことで、将来への目標を設定し、積極的に学校生活を送る意志が生まれていくものと想定される。

今までの広報ツールとしては、一般的な学校案内・過去問題集をベースとして、サブツールにデータ白書や施設紹介冊子などがある。また、紙ベースでは表現でき得なかった学校行事の動画や写真集も CD や DVD にてその様子を配布することも行っている。しかし、そのどれも学校全体を見通しての発信物であり、個々の生徒が**生徒自身の言葉**で生き活きとした様子を正しく表現しているかといえ、否である。よって、生徒1人1人が学校外で接している人々との関わりを「感謝の手紙」という成果物でもって表現できることは、生徒の目線で心の教育をする学校のイメージアップに効果があると言える。

### 第3章 概要と成果

本研究は、平成21年度の1学期を中心に「技術（中学生）」および「情報（高校生）」での授業実践を行った。以下にその計画を述べる。

#### ●教科としての授業実践

本校では、中学生においては「技術」（週1時間）、高校生においては「情報」（週2時間）に授業時間数が配当されている。

第1時 (4月)	ガイダンス、テーマ・趣旨説明 ・中学生は塾の先生へ1枚、高校生は塾と中学の先生の2枚を作成する。 ・手紙については、本校教師が見ることがあることを前提に書くこと。
第2時	手紙文の書き方（ひな形）説明 ・自分の名前、出身学校名、先生のお名前 ・生徒本人の写真 ・お世話になった先生へのメッセージ、現在の様子と今後の目標
第3時 (5月)	「感謝の手紙」の下書き ・手書きで、縦書き原稿用紙に埋める作業をする。
第4時	マイクロソフト「WORD」の使い方説明、デジカメの操作実習 ・ページ罫線、図の挿入、クリップアート、ワードアート ・デジカメでお互いに生徒の写真を撮り、USB接続でPCに取り込む。
第5時	マイクロソフト「WORD」で手紙文の制作 ・生徒写真の画像貼り付け・加工
第6時 (6月)	印刷、ラミネート加工の実習 ・校正
第7時	完成 高校生は緑色（図1）、中学生は桃色（図2）いずれも見本。

お世話になった先生へ 2009年  
樟蔭高等学校から「お久しぶりです(o^o)」

出身校  
大阪市立しょういん中学校

お世話になった先生のお名前  
★樟蔭 花子先生★

名前  
♪樟蔭 花子♪

お世話になった先生へのメッセージ

お久しぶりです。★中学を卒業して、あっという間に2ヶ月が経ちました!!!  
が今こうして樟蔭に通えているのは先生のおかげです。本当にありがとうございます  
♪毎日の授業、わかりやすく、楽しかったです!!!私、どちらかというと国語は  
キライでした。でも、先生の授業を受けて、スキになりました★国語のおもしろさを  
たくさん教わりました。苦手だった文法も、わかるようになりました。そんな先生の  
授業をうけられなくなってしまい、とても残念です↓↓また中学校へ遊びに行きま  
す★その時まで私のこと覚えておいて下さい。最後に・・・室美北生で、そして3年  
3組楽田学級で本当によかったです!室美北での3年間は絶対に忘れません。

現在の様子と今後の目標

慣れない地に足を踏み込むのは、とても不安でした。まわりは知らない人ばかりで、  
こんな所で本当にやっていけるのが、こわかったです。でも今はクラス全員が友達  
で、毎日楽しく過ごしています。勉強ばかりでイヤにはなるけど、将来の自分のため  
と思いがんばっています。今後の目標としては、国公立大学に行けたらと考えていま  
す。そこで、何が資格をとりたいです。希望は、調理師免許か、栄養士免許です。料  
理したりするのが好きで、人の健康などを考えたりしたいと思ったからです!!!  
だから、毎日勉強を頑かにせず、夢を叶えられるよう、がんばります★  
応援よろしくお祈りしますっ☆

樟蔭高等学校  
〒577-8550 東大阪市豊原西4-2-26  
TEL 06-6723-8185/FAX 06-6723-8166  
http://www.osaka-shoin.ac.jp/

はばたけ、知性。

図 1

お世話になった先生へ 2009年  
樟蔭中学校から「お久しぶりです(o^o)」

出身校  
しょういん塾 樟蔭教室

お世話になった先生のお名前  
船田智史 先生

名前  
樟蔭 花子

お世話になった先生へのメッセージ

こんにちは。元気ですか?私は、元気です。船田塾で過ごした日は、絶対に忘れな  
い思い出になりました。遊ぶ時は遊ぶ、勉強するときは勉強すると言うけじめを  
教えてくれた先生にすごく感謝しています。つらいときも支えてくれたので、こ  
こまで来る事ができました。本当にありがとうございます。私は2年間、船田塾に  
いたけれど船田先生が勉強を教えてくださったのは約1年間です。1年間という本当  
に短い間でしたがいろんな面でも私自身、成長できました。いろんな思い出があっ  
た1年間だったと私は思います。また船田塾に行きたいと思っているので生徒を支えら  
れる、生徒から頼られるような今まで以上に良い先生でいてください。

現在の様子と今後の目標

私は今、この樟蔭中学校で毎日楽しく過ごしています。友達もでき、仲良くしていま  
す。勉強面では理解です。でも今までやったことのない英語はちょっと苦戦していま  
す。テストでは良い点がとれるようがんばりたいです。クラブはダンスが第一希望  
だったので、最近バレエボール部に行かなうかとも思っています。先生方も良い  
先生ばかりです。明るく接してくれ、たまには生徒を叱るという生徒思いの先生も  
多いです勉強面でもがんばりたい、後クラブで活躍できるような自分になりたいで  
す。樟蔭中学校・高校を卒業したら礼儀正しく知的な女性になれるように努力しよう  
と思っています。

樟蔭中学校  
〒577-8550 東大阪市豊原西4-2-26  
TEL 06-6723-8185/FAX 06-6723-8166  
http://www.osaka-shoin.ac.jp/

はばたけ、知性。

図 2

●校務分掌としての生徒募集活動

入試広報室が、生徒作品がほぼ完成した7月以降、各作品を宛先別（小学校・塾・中学校など）に振り分け、各地域担当の入試広報（生徒募集）委員の先生に手渡される。

7月から9月にかけて、広報用アイテムとして、各訪問先に配達をし、生徒募集活動を行う。（入学したその生徒の近況報告と併せて、学校生活の様子も説明する。）ただし、遠距離などの理由で、入試広報委員が直接訪問をすることが不可能な場合は、郵送をした。

第4章 考察と評価

以下に、いくつかの考察を述べる。

- 入学当初にもっている生徒の基本的コンピュータスキルの確認ができ、写真画像の編集作業も含めたワープロソフトの高度な使い方を生徒全員にマスターさせることができる一方で、「伝えたい気持ちを正しく伝えることができるか」という情報リテラシーの指導に転換することができた。
- 伝達媒体として電子メールやケータイを用いるのではなく、敢えて「手紙」というメディアを使用することで、正しい言葉遣いや目上の人への適切な文章表現の習得を目指すことができた。また、電子メールとの違いを明らかにして、情報伝達媒体の選択の重要性を認識させることができた。
- 実際に、送付相手に手紙を渡すことによって、相手からの返事も十分に期待ができ、双方向のコミュニ

ケーションが生まれた。(実際に、相手からの返答には、郵便の手紙、メール、ケータイなど、様々な媒体が使用されたことが生徒の聞き取り調査でわかった。)

- パソコンを使った手紙をカラー印刷で仕上げ、ラミネート加工することで豪華に見せる効果により、私学の優位性をはっきりと打ち出せた。
- 学校内の様子をその生徒の実体験として語ってくれる広報ツールとして利用できることが証明された。
- 単年度ではなく、継続していくことで、学校の信頼感も増すことができ、私学として在校生1人1人の面倒見のよさをアピールすることができることがわかった。
- 出身学校・塾の先生方が、実際に私立学校を勧めるのには、公立にはないきめ細やかな指導に期待していることはあきらかたで、特に、教え子が私学でどのように学校生活を過ごしているのかは、非常に気になる部分であることは間違いない。その点からも、生徒1人1人の声を手紙にのせて、生徒たちの言葉で伝えるという試みは、十分に効果的であると言える。

## 第5章 まとめ(課題と展望)

以下の課題も浮かび上がってきた。

- 学校の入試広報の立場からは、出身塾や中学校へのツールとして有効ではあるが、生徒の立場からすると、塾や中学で様々な経験を経て、入学している生徒も増えつつある。中には、「感謝」という気持ちを、出身学校の恩師に持たずにいる生徒は手紙を書くことができず、また感謝の気持ちを言葉にすることができないために入試広報委員が相手に持って行きにくいケースもあった。また、「感謝の気持ちを伝える」テーマでは、手紙を書きにくいことを訴える生徒もいた。  
⇒授業としての立場と入試広報のスタンスに、折り合いをつけていながら、生徒の気持ちを優先して臨機応変に対応することが必要になってくると思われる。
- 実際に実践授業をする時期が、5月～6月であるのに対して、相手に届くのが7月後半から9月にかかることもあった。入学当初の気持ちを綴った手紙が2学期に届くこともあったために、手紙の内容がずれたものも生じた。  
⇒今回は、生徒募集の担当教師数名で、配布・訪問活動を行ったために、高校生(300人×2枚)、中学生(110枚)を配り切るのに時間がかかってしまった。全校あげて、全教師で集中して短時間で完了を目指すべきであった。
- 「情報」および「技術」という教科内での指導において、手紙という体裁を保ちつつ、手書きではなくパソコンを使用する制作物であったために、顔文字が多用されたり、話し言葉の羅列である生徒も多く見受けられた。  
⇒想定していたことであったために、まずは、手書きで下書きをすることにしたのであるが、「気持ちを伝える」というテーマのもと、情報伝達の媒体と同時に、表現方法の多様性には難しさを感じた。目上の方への手紙という設定であったが、生徒たちは手書きとIT機器との区別をするようである。また、高校生に多かったのが、塾や中学校の先生に対して、友達としての感覚でコミュニケーションをとることが当たり前になっていることであった。
- 本研究では、情報および技術科の授業で得られた成果物を、生徒募集で利用する実践であったが、今後は、文章の表現という観点で国語科や、デザインを重視する美術科の協力を仰ぎながらさらに発展性のあるものに仕上げたい。